留学記念エッセイ –症例報告の書き方–

原田 洸

●はじめに

はじめまして、2021 年 7 月より Mount Sinai Beth Israel の Internal Medicine Residency Program のレジデントとして勤務を開始させて頂くこととなりました、原田洸と申します。西元慶治先生をはじめ、N program の皆様の多大なサポートにより、長年の夢であった米国臨床留学のスタートラインに立つことができました。この場をお借りして心より感謝致します。この留学記念エッセイが、少しでも多くの方に臨床留学に興味を持って頂くきっかけになれば幸いです。

●目次

１、自己紹介

２、留学を志したきっかけ

３、USMLE 受験

４、マッチングと面接の準備

５、ケースレポートの書き方

６、最後に

１、自己紹介

2010 年４月 岡山大学医学部医学科 入学
2012 年９月 イタリア ラクイラ大学 基礎研究留学 (3 ヶ月)
2015 年３月 アメリカ ミシガン大学病院 内科 臨床実習 (1 ヶ月)
2016 年３月 オーストラリア メルボルン オースティン病院 泌尿器科 臨床実習 (1 ヶ月)
2016 年３月 岡山大学医学部医学科 卒業
2016 年４月 岡山大学病院 初期研修、岡山大学 大学院 医歯薬総合研究科 入学
2018 年４月 岡山大学病院 総合内科・総合診療科 (内科専攻医 後期研修)
2018 年７月 アメリカ ハワイ クイーンズメディカルセンター オブザーバーシップ (1 週間)
2020 年３月 岡山大学大学院 医歯薬総合研究科 卒業 医学博士号取得
2021 年４月 岡山大学病院 助教

私は岡山で生まれ育ちました。家族に医療者がいたわけではありませんでしたが『人の役に立つ仕事をしたい』と思い医師の道を志しました。岡山大学医学部に入学し、初期研修も出身大学の大学病院で行いました。初期研修終了後は、総合内科・総合診療科の医局に所属し、３年間の内科専攻医の後期研修医プログラムを開始しました。初期研修修了後から大学院にも入学し、４年間の博士課程を修了しました。私の所属する岡山大学総合内科・総合診療科の教室は、教授をはじめ、若者の可能性を信じて成長させてくれる先生方ばかりで非常に恵まれた環境と感じます。症例報告や臨床研究、書籍の執筆などの機会を頂き、卒業後の５年間で臨床面でもアカデミックな面で大きく成長することができました。

２、留学を志したきっかけ

私は帰国子女どころか海外旅行さえしたことがない、いわゆる『純日本人』で、人生で初めて海外に渡航したのは大学３年生の時でした。イタリアへの３ヶ月間の研究留学でしたが、世界各国から集まる留学生との交流を通して、「自分とは全く異なる価値観を持った人が世界にはこれだけいるんだ」と感銘を受けたことを覚えています。いかに自分が狭い世界で生きているかに気づくと同時に、もっと留学経験を積み未だ見ぬ広い世界を経験したいと思い始めました。大学５年生の３月にミシガン大学病院の内科で１ヶ月間臨床実習を行う機会があり、そこで入院患者の包括的なケアを行うホスピタリストのシステムを経験しました。効率的で体系立ったシステムに感動し、将来日本や世界各国が取り入れるべき仕組みであると感じました。この頃から米国でホスピタリストの最先端のトレーニングを受けたいと思い、臨床留学を志すようになりました。

３、USMLE 受験

2015 年８月 STEP１合格
2016 年１月 STEP 2CK 合格
2017 年４月 STEP 2CS 合格
2020 年 10 月 マッチングプログラム登録開始
2021 年３月 Match Day

医学生の方はUSMLEの受験のタイミングを悩む場合が多いかもしれません。私の場合は、6年生～研修医1年目の間に3つの試験を受験しました。2015年3月にミシガン大学病院で臨床実習をした頃からUSMLEを受験しようという気持ちが強まり、STEP 1の勉強を本格的にはじめ、6年生の8月に受験をしました。国家試験の後にはオーストラリアへの臨床実習が控えていたので何としてでも国試前にSTEP 2CKを受験したいと思い、国試の2週間前にCKを受験しました。結果的にCKが国試の対策にもなっていたので、このようなスケジュールは良いのかもしれません。

初期研修は岡山大学病院で行いました。休日や比較的時間のあるローテーションを利用して、約6ヶ月かけてCSの勉強を行いました。医療面接を練習する相手を見つけるのが課題でしたが、留学生が集まるカフェの担当の方にお願いして、家庭教師という形で協力してくれる人を探しました。無事に協力してくれるアメリカ人の学生見つかり、週に1回の頻度で会って練習を繰り返しました。オンライン英会話も併用しながらFirst Aidを2周し、とにかくフレーズがすらすらと出てくるように練習しました。練習の甲斐もあって本番も滞りなくなく進行し、無事に1回で合格しました。

４、マッチングと面接の準備

私の学年から新しい専門医制度が導入され、2 年間の初期研修の後、日本で内科専門医を取得するためにはさらに 3 年間の後期研修が必要になりました。卒後すぐに 4 年間の大学院に入っていたこともあり、大学院の研究と後期研修のプログラムが修了する卒後５年目の年にマッチングに臨む計画を立てました。2021 年度のマッチングは COVID-19 の流行のためどこのプログラムもオンラインでの面接になり、これは IMG にとって有利になるのか不利になるのかわからず、不確定要素の多い中でのマッチングプロセスになりました。英語での面接を受けるのは初めての経験で、特に私はネイティブスピーカーではないため入念に準備する必要がありました。First aid を参考に質問をリストアップし、自分の CV や PS から聞かれそうな質問を想定して準備しました。回答はまず日本語でロジカルに考え、英語にフィットするように修正しました。オンライン英会話のネイティブ講師に適切な表現に直してもらい、それを暗記するということを繰り返し、数ヶ月かけて準備を進めました。質問とその回答はどんどん蓄積していき、面接前には Word ファイル 30 枚分にもなりました。STEP2 CS の受験の時と同じく、直前になっても『まだ準備が足りていないのでは』という不安な気持ちに陥りましたが、実際の面接ではほとんどが想定通りの質問であったためスムーズに受け答えができ、面接官にも興味を持ってもらえたような印象

でした。

５、ケースレポートの書き方

USMLE 受験やマッチングのこと以外にも触れるのが望ましいとのことで、得意分野かつ皆様のお役に立てる点に関しまして『初心者のためのケースレポートの書き方』について記載させて頂こうと思います。このエッセイを読んで頂いている熟練した先生方には大変恐縮する内容なのですが、ここでは主に、初めて症例報告の執筆に取り組む医学生の方や初期研修医の先生方を対象に、抑えるべきポイントを説明していきたいと思います。

１、ケースレポートは留学に役立つか

私は、初期・後期研修の５年間で 32 例のケースレポートを執筆しました。臨床留学のために執筆していたというよりもむしろ、症例を共有して他の医療者の役に立ちたいというような想いで取り組んできました。『研究や論文の業績を評価しない』と公言しているプログラムもありますが、CV に実績を記載することができ、面接でも論文実績や症例報告の執筆に関する質問を受けることも多く、留学の実現に対してポジティブな方向に働いたと感じています。特に、今後は STEP１ の点数表示が無くなったり STEP2CS が廃止になったりという変化に

伴い、CV に書けるような客観的な実績を積むのが重要な戦略になってくると思いますが、症例報告はその１つの武器になると思います。

２、症例報告の種類

症例報告には、主に Introduction, Case presentation, Discussion の３つのパートで構成される『Full case report』と、画像を中心に Case presentation と Discussion あわせて 300～500 語程度の短さの、いわゆる『Picture paper』というものの２種類があります。初心者はまず文量が短い Picture paper から書き始めてみるのがおすすめです。

３、症例選びはどうすればよいか

学生時代の臨床実習や、初期研修のローテーションの中でも、常に症例報告の執筆のチャンスは転がっています。症例報告執筆に向いているのは以下のようなパターンの症例です。

１、新しい症例 (新しい治療法、新しい検査)

２、珍しい症例 (珍しい疾患の合併、世界で数十例しか報告がないもの)

３、教育的な症例 (見逃されやすい疾患、失敗から学んだ症例、よくある疾患の珍しい経過)

これらは学会発表の症例選びでも重要視される点であることから、指導医に『学会発表をしよう』と勧められた症例は、ほぼ間違いなく症例報告として執筆できると考えて良いでしょう。また、CT や MRI 画像をみながら他の先生たちと話して盛り上がったような症例は画像上のインパクトがあることを意味しており、Picture paper の執筆に向いています。

４、ケースレポートの書き方のコツ

執筆するケースを決めたら、いよいよ執筆です。書き方のポイントはまず書き始める前に、類似症例の丁寧に検索することです。過去に報告されている類似のケースレポートを Pubmed 等で検索し、少なくとも５～１０例を目安に見つけておきます。また、その疾患の Review article もあると便利です。過去の症例報告をじっくり読み、Case presentation 部分にはどのような内容を含めるべきか、Introduction や Discussion ではどの点を強調してどういう流れで書くべきか、という点を類似論文の書き方を参考に練っていきます。この時、『剽窃』にならないよう、言い回しや文献の引用方法には十分注意します。全体を通して「なぜこの症例が報告に値するか」というメッセージ性を強調するのがポイントです。適切な英語表現がわからない場合には、DeepL 翻訳や Google 翻訳と

いった自動翻訳機能を使用し、日本語で論理的な文章を書いてから翻訳するというのも有効な手段の１つです。

５、英文校正と投稿

一通り執筆を行ったら、上級医の指導を受けて添削を行います。「Grammarly」といった自動で文法ミスを修正してくれるサービスもあるので積極的に活用しましょう。また、共同著者にネイティブスピーカーがいない限りは、英文校正サービスを利用するのが得策です。私の周囲では「Editage」を利用している人が多く、私もいつも利用しています。英文校正を終えた後はいよいよ投稿作業に入りますが、最初は投稿先の選定や投稿作業は難しいため、慣れている上級医の先生にお願いするのが良いでしょう。以上のプロセスは、短い報告でも最初は膨大な時間がかかりますが、慣れると数日で書けるようになります。

６、最後に

私の自己紹介、留学を志した経緯、USMLE 受験、ケースレポートの執筆の方法について簡単に記載させて頂きました。最後になりましたが、このような機会を与えていただきました西元慶治先生をはじめ、『君ならできる！』といつも背中を押してくださった N プログラムの先輩の山田悠史先生、サポートをし

て頂いた全ての方々に改めて心よりお礼を申し上げたいと思います。現時点ではホスピタリストや老年医学に興味があり、米国での内科・老年医学のトレーニングを修了後は、現地での経験を活かして日本でのホスタリストシステムの構築や老年医学分野の発展などに貢献していきます。N プログラムの素晴らしい先輩方の活躍に続けるように全力で取り組んで行きたいと思います。

2021 年 4 月吉日

原田 洸